

私はモルモットⅡ ——学生による授業評価'93. 実施報告——

鳥居元宏
イラスト・佐々木侃司

——はじめに (『藝術16』の反響)——

平成4年12月1日に実施した“学生による授業評価”の集計結果を『私はモルモット』という題で大阪芸術大学・紀要『藝術16』に掲載して頂きました。

紀要が発刊されるや、思いがけず多方面の方々から御意見を頂くことが出来ました。意外な方が興味を持って下さったのには大変勇気づけられました。

正月の2百円会主催のパーティーでは、塚本邦彦理事長から声をかけて頂き、

「すぐというわけには行かないが、いずれはこうしたことが行なわれるようになるのではないか」

という主旨の御感想を聞かせて頂くことが出来ました。

然し、此処でも意外だったのは、御意見を聞かせて下さった方々が、理事長はじめ学科長クラスの先生方、役職におつきの事務職員の方であったことです。私の期待した若い先生方の御意見が僅かお2人しか頂けなかったのは一体どういうことなのでしょう。少々不思議でなりません。

私の考えでは、実践面でも学問上でも、そして人間的にも、既に完成の域に近づいておられる先生方よりも、これから実践面、学問面、人間的な面においても大きく飛躍して頂かなくてはならない中堅層から若手の先生の方が、より興味を示して下さるのではないかと考えていたからです。

何かをやれば、評価を受ける。これは当り前のことで

はないでしょうか。

映画監督、シナリオ作家として作品を発表し続けている私は、一作ごとに、面白いのつまらないの、いいの悪いのと様々の評価、批判を受けて来ました。大学の授業と云えども、人前で何かをやる以上は広い意味でのパフォーマンス、評価、批判をまぬがれることは出来ないのではないのでしょうか。そして授業である以上、評価を下すのは当然学生ということになります。“学生による授業評価”は至って当然のことで、やらない方が不思議にも思われます。

側聞するところによると、ハーバート、スタンフォード等アメリカの大学では“学生消費者論 (Student Consumerism)”が教育の根底にあるようです。我々教員は学問(授業)という商品を提供するサービス業であり、学生は学問(授業)という商品を消費するクライアント(顧客)ということになります。

こう云うとすぐ、

「おいでやす。毎度おおきに！」

と、揉み手をする昔風の商人の姿がイメージされますが、それは違うでしょう。或る場合は超難解な学術的理論を講述するのもサービスですし、或る場合は大声で嘸鳴りつけるのもサービスになる筈です。

良いサービスを提供しようとするれば、当然マーケット・リサーチ、顧客調査をするのは常識でしょうし、提供した商品に対してアフター・サービスをするのも常識です。学生が授業に対して何を求めているかを知り、受講した授業に何を感じているかを常に追っていないければ、消費者である学生に見放されてしまうのも常識とい

うものでしょう。

実践面でも学問上でも、今後、大いに発展の可能性のある若い先生方に、この“学生による授業評価”に関心を持って頂き、役に立てて頂けないものだろうか、などと思っているのですが、いらぬおせっかいなのでしょうが……。

この2月末、私が個人的に主催しているシナリオの勉強会の席上、参加した学生達に『藝術16』に掲載の『私はモルモット』の抜刷を回覧、意見を求めたところ、「レポートにはレポートで応じよう」ということになり4通が寄せられました。4人ともこの3月に卒業して行ったV90の学生で、1人は完全に戸惑っているようでしたが3人は真正面から取組み、大変興味のある意見を聞かせてくれました。全文を掲載したいところですが長くなるので、一部を抜粋して載せさせて貰います。

『(“私はモルモット”を)読んでみるとこれが非常に興味深い内容だった。これ程学生の本音が出るとは思ってもよらなかった。さらに、それらの意見と自分の意見とが殆んど似かよったものである事に驚いた。(S君)』

『4年の課程を終えようとしている今、思えることは、大学には、何とかその知識や経験、技術を盗みとってやろうと思える内容のある先生方と、この人がどうして教壇に立っているのだろうと疑問に思う奇妙な先生方がいるということでした。(T君)』

『先生の怠慢は許されるものではないが、大学というビニールハウスの中でぬくぬくとうたた寝している人も少なくない。(N君)』

『設問Ⅰは意味がない。不必要だ。学生の感受性は十人十色で、評価の数字が散るのは当然の事だ。個人的にこれを知っても対処に困るのではないだろうか。重視すべきは設問Ⅱである(中略)これは明らかに他の授業又は教授との比較意見になっている。(S君)』

『学生にしても、先生を評価するのだから、いい加減なことではいけません。口先ばかりで先生を非難したところで、結局はそれは自分にかえってきますから……。つまり、学生もおちおちしていられなくなるわけで、それは大変によいことです。(T君)』

『「授業中嫌な雰囲気が流れない」という意見は、「嫌な

雰囲気が出る授業」が他にあることを示し、「全ての学生に平等」という意見は、「不公平な教授」が他に存在することを示す。(N君)』

まだまだ掲載したい辛辣な意見があるのですが、この位にしておきます。それにしても、何と正確に、しかも冷静に、現実を噴めていることでしょうか……。 “学生による授業評価”に比べられるほどウチの学生は質が高くないという某先生の御意見をチラッと聞いたことがありますが、これは明らかに思い上がった間違った見方でしょう。学生は良く見ています。学生を舐めてはいけないと思います。常に学生の声に耳を傾ける姿勢は持ち続けたいと思います。



—— 第2回の調査 ——

平成5年12月7日、5時限、第1回調査を行なったと同じ、私の担当する講義科目『映像演出論』に於て、第

2回の調査を行ないました。

調査票は、昨年同様、多摩大学の調査票に一部私が加筆したものを、多摩大学経営情報学部長中村秀一郎教授の御好意でまた使わせて頂きました。同じ調査票を使ったのは、昨年の調査結果と比較する資料が欲しかったからです。

調査当日、受講登録192名中出席者は84名、出席率43.75%、あまり出席率がよくないのが残念でした。

当日の学生の反応ですが、昨年よりは戸惑いが少なかったようです。若しかすると、こういう調査をするということが、学生達の中にクチコミで広まっているのかもしれないかもしれません。そうだとすると、私にとっては有難いことです。学生達も或る覚悟を持って調査に臨んでくれるでしょうから、より正確で辛辣な、厳しい評価を期待することが出来るからです。こうした調査を行なう以上、厳しい結果を恐れているは何も出来ません。どんな厳しい評価も望むところ、真正面から受け上める気概と勇気を持ちたいものだと思います。

調査票については、昨年と同じですので『藝術16』に掲載したものを御参照頂くとして割愛させていただきます。

—— 調査結果の集計と分析

調査結果の集計は、前回同様、学科長佐々木侃司先生の監査の下、研究室の副手諸君にやって貰いました。そのまま掲載しますので御覧頂きたいと思います。

前回同様、私なりに集計結果を分析、前回の結果と比較、検討してみます。

設問Ⅰに関しては、V90の卒業生に必要なのではと云われてしまいましたが、私にとっては参考になることが多々ありました。

自分の授業がどのように学生に受取られているか、つまり自分の授業を客観視するのはかなり難しいものです。自分では客観的に冷静に判断して進めているつもりでも、知らず知らずのうち一人よがりの押つけになっ

てしまっている場合がないとは云えないからです。この設問Ⅰの結果から、その辺り、つまり自分の授業の客観的姿が浮んで来るのではないのでしょうか。

事実、'92年度の調査から、学生が「授業を静粛に保つ配慮」をもっとして欲しいと考えていることが判りました。そこで'93年度は、オリエンテーションの時間に、

「楽しい授業をやるつもりだが、楽しくやるのとチャランポランやいい加減を認めるのとは違う。出席とお喋りには厳しく対処するので覚悟しといて欲しい」

と、宣言し、授業中教室がさわがしくなるとピタリと話を中断、静まるのを3・4分待つようにしてみました。初めは怪訝そうな顔をしていた学生も、すぐにそれと気づき、喋っている学生の方を振り返ったり、さり気なく袖を引いて注意し合ったりするようになり、効果があったようです。「4、授業を静粛に保つ配慮」の評価平均点が2.9から3.3に上っているの、学生達もその辺りを評価してくれているようです。

それ以外の項目は、前回と今回の結果を比較してみても、ごく僅かの変化はあるものの、殆んど同じような評価が出ているようです。これは、私にとってはあまり嬉しい結果ではありません。この1年間、私の授業があまり進歩・成長していないということを意味するからです。前回の結果も今回の結果も、私の授業は、『学生に対し関心が深く』『担当科目に情熱はあり』『興味深く』はあるのだが『準備が足りず(或いは、準備の効果が出ていず)』『重点の要約』の足りない授業であるという点では変わっていないということになるからです。大いに反省しなくてはならない点だと思いますが、設問Ⅰ全体の評価平均点は、前回の3.62から今回は3.66と微々たるものですが上っており、授業内容の低下はなかったようなのが救いではないかと思っています。

設問Ⅱの授業の良い点、悪い点について。良い点は「2、ポイントを押さえている」「3、基礎から説明する」「4、説明が体系的」「8、話が面白く為になる」「9、熱意がある」「11、人柄・授業に親しみがもてる」「12、口調が明瞭で聞き取り易い」の7項目で評価が上っていましたが、「5、内容に深みがある」「6、参考文献の使用が効果的」「7、OHP等の使用が効果的」の3項目が極端に

低いのは前回同様で、此处でも私の授業があまり変化・成長していないことを示しています。

意見もしっかり聞いてくださるところがよい」というの

学生による授業評価集計表

I この授業について、以下の項目で最もあてはまると思う評価数字に○印を付けて下さい。
(上段：人数 下段：パーセント)

| | | | | | | 合計 |
|-----------------|------|------|------|------|-----|-----|
| | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | |
| 1. 説明が明快 | 22 | 37 | 22 | 3 | 0 | 84 |
| | 26.1 | 44.0 | 26.1 | 3.5 | 0 | 100 |
| 2. 良く学習している | 9 | 29 | 38 | 7 | 1 | 84 |
| | 10.7 | 34.5 | 45.2 | 8.3 | 1.1 | 100 |
| 3. 要点をうまく要約 | 18 | 30 | 32 | 4 | 1 | 84 |
| | 21.4 | 35.7 | 38.0 | 4.7 | 1.1 | 100 |
| 4. 授業を静粛に保つ配慮 | 10 | 19 | 38 | 16 | 1 | 84 |
| | 11.9 | 22.6 | 45.2 | 19.0 | 1.1 | 100 |
| 5. 別の意見も紹介 | 5 | 29 | 35 | 9 | 2 | 84 |
| | 10.7 | 34.5 | 41.6 | 10.7 | 2.3 | 100 |
| 6. 授業が興味深い | 11 | 34 | 29 | 8 | 2 | 84 |
| | 13.0 | 40.4 | 34.5 | 9.5 | 2.3 | 100 |
| 7. 学生に対し関心が深い | 29 | 30 | 20 | 4 | 1 | 84 |
| | 34.5 | 35.7 | 23.8 | 4.7 | 1.1 | 100 |
| 8. 担当科目に情熱 | 31 | 36 | 16 | 0 | 1 | 84 |
| | 36.9 | 42.8 | 19.0 | 0 | 1.1 | 100 |
| 9. 学生の理解力の水準の把握 | 10 | 26 | 34 | 13 | 1 | 84 |
| | 11.9 | 30.5 | 40.4 | 15.4 | 1.1 | 100 |
| 10. 批判的意見も聞く | 17 | 31 | 26 | 11 | 0 | 84 |
| | 20.2 | 36.9 | 30.9 | 13.0 | 0 | 100 |

II 授業の良い点 悪い点について最つでも○印を付けて下さい。

良い点

| 項 | 目 | 人数 | % |
|-----|---------------|----|------|
| 1. | 丁寧で解り易い | 21 | 25.0 |
| 2. | ポイントを押さえている | 33 | 39.2 |
| 3. | 基礎から説明する | 34 | 40.4 |
| 4. | 説明が体系的 | 24 | 28.5 |
| 5. | 内容に深みがある | 12 | 14.2 |
| 6. | 参考文献の使用が効果的 | 7 | 8.3 |
| 7. | OHP等の使用が効果的 | 10 | 11.9 |
| 8. | 話が面白くなる | 49 | 58.3 |
| 9. | 熱意がある | 40 | 47.6 |
| 10. | 授業にメリハリがある | 20 | 23.8 |
| 11. | 人柄、授業に楽しさがもてる | 42 | 50.0 |
| 12. | 口調が明確で聞き取り易い | 65 | 77.3 |
| 13. | その他 | 5 | 5.9 |

<良い点のその他の記述>

- ・生徒をばかにしていない所がいい
- ・基礎先生の授業らしくていい
- ・空々としていてよい
- ・先生の声の大きさはとて面白い
- ・説明が面白くない
- ・学生による授業評価を行なっているのがよい
- ・他の学生の意見も紹介してくれてよい
- ・先生の人物はすきだ
- ・自分たちの意見もはっきり聞いてくださるところがよい
- ・構えない

悪い点

| 項 | 目 | 人数 | % |
|-----|---------------|----|------|
| 1. | もっとおしゃべりを注意 | 7 | 8.3 |
| 2. | 説明をもっと詳しく | 18 | 21.4 |
| 3. | 説明がくどく無駄が多い | 11 | 13.0 |
| 4. | ポイントがはっきりしない | 11 | 13.0 |
| 5. | 説明が体系的でない | 5 | 5.9 |
| 6. | 関連事項の説明が少ない | 13 | 15.4 |
| 7. | 面白みに欠ける | 7 | 8.3 |
| 8. | 自分勝手に進める | 10 | 11.9 |
| 9. | 授業が平板で単調 | 13 | 15.4 |
| 10. | 声が小さく聞き取りにくい | 2 | 2.3 |
| 11. | 口調が小さく聞き取りにくい | 0 | 0 |
| 12. | 口ごもり聞きづらい | 0 | 0 |
| 13. | メリハリがない | 5 | 5.9 |
| 14. | その他 | 18 | 21.4 |

<悪い点のその他の記述>

- ・同じ話を何度も繰り返すことがある
- ・例の数字の取入れが地角からアプローチしてほしい
- ・資料が少し古いのではないだろうか
- ・内容より先生の存在の方が目立つ
- ・父兄の立場からはちょっと難解な説明が多い
- ・ちょっとしたフリントや、真鍮がほしい→これが多い
- ・授業終了ギリギリにみんなですべて出陣だけマツとって行く阿呆どもも一度叱りつけてほしい
- ・返り文がほしいと、一つの授業にまとめてするだけなので、まばらに、一つの項目に一回くらいすばしとれば、集中とメリハリがよくなる
- ・映画をもう少し活用してほしい
- ・ない
- ・服装にまてとまてごちゃごちゃしている
- ・質問が多い

III 授業・履修科目の全体評価

上段：人数 下段：パーセント

| | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
|--------------|------|------|------|------|---|
| 1. 全体的教育効果 | 12 | 47 | 21 | 4 | 0 |
| | 14.2 | 55.9 | 25.0 | 4.7 | 0 |
| 2. 履修に値するか | 31 | 31 | 21 | 1 | 0 |
| | 36.9 | 36.9 | 25.0 | 1.1 | 0 |
| 3. どの程度出席したか | 16 | 42 | 15 | 11 | 0 |
| | 19.0 | 50.0 | 17.8 | 13.0 | 0 |

M 良くする為の意見

- ・色々な映像に関する本を体系的なコメントを付けて紹介してほしい
- ・例えなくさん出してもらうと納得しやすい
- ・現場的なプリントを多用してほしい
- ・スライドや板書を多用してほしい
- ・「カードマシーン」に、赤大の赤い紙を貼って、その色紙に演習のポイントを説明するというのはどうか
- ・履修を促すとか、学生をもっと授業に参加させればよいのではないか
- ・何を教えたのか、その方がよく聞けるのではないか
- ・もっと質問の時間をもっとほしい
- ・演習は作業的代弁的意味が多すぎるので、人生論を研究するような授業、例えば、人生論を研究する授業など、もっとしてほしい
- ・もう少しやさしくして、自分たちがどういう苦労があったとかいう話をしてほしい
- ・先生の存在をもう少し感じてほしい
- ・大事なこと、重要なこと、その口調を上げたい
- ・出席の悪いなど、その比較研究など、個性性による出席の悪いなどを分析してほしい

V 学生番号・氏名の記入

| | 人数 | % |
|------|----|------|
| 記入あり | 69 | 82.1 |
| 記入なし | 15 | 17.8 |

然し、「13, その他」の記述の中に、「生徒をばかにしていない所がいい」というのがあったのは大変嬉しく思いました。これは、前回の集計の中の「悪い点」「14, その他」の記述に「バカにされているのではと思う皮肉が時折入る」というのがあり、授業中、特に注意していた事の1つだったのです。どうやら、この点は改善されたようでホッとしました。

「他の学生の意見も紹介してくれてよい」「自分たちの

は、例の出席カードの裏のメッセージのことでしょう。2, 3 週分をまとめて匿名で披露、質問に答えたり、私の見解を話したり、時には反論したり、これは今でも続けています。

これの面白いところは、続けているうちに2, 3の学生と往復書簡風の交流が生れて来たことです。学生のメッセージに私が反論、それにまた学生が反論し、また私が反論、こうしているうちに、それらの学生が研究室へ

現われるようになって、遂には、

「どうしてもっと早く研究室へ来なかったのか、研究室に背を向けるのが骨のある学生だと恰好つけていた自分が馬鹿だった」

と云うようになりました。ちょっとしたことが学生の姿勢を変えるキッカケになるということが発見出来たのは収穫でした。出席カードのメッセージは、ただ書かせるだけでなく、後の使い方によってはまだまだ色々な方向に発展させることが出来そうです。

授業の悪い点では、「2, 説明をもっと詳しく」「6, 関連事項の説明が少ない」「9, 授業が平板で単調」の3項目が増えていました。

若干、言い訳がましくなりますが、映画の演出は（芸術創作全般はと云い替えてもあながち間違いではないかと思いますが）、教えられる部分と教えられない部分とがあり、教えられない部分の方がより大切だと思っています。それは、作り手が自分で開発し、啓発しなければ個性ある作品は作れないと思うからです。

にも係わらず学生は、総てを教えて貰えると思込んでいるのではないのでしょうか。だからこそ、『説明をもっと詳しく』して『関連事項まで教える』と云うのではないのでしょうか。私としては、この指摘は、

「甘えるな。そんなことで芸術創作は出来ないぞ！」と、切り捨ててもいいように思うのですが、如何でしょうか。

「9, 授業が平板で単調」が15.4%もあるのは、良い点の「10, 授業にメリハリがある」の23.8%と矛盾するようで、どう判断するか難しいところです。

「14, その他」の記述では、前回同様、「ちょっとしたプリントや黒板書きがほしい」というのが圧倒的に多かったのは、大変恥かしいことだと思っています。どうやら私の授業の最大の欠点はこの点にあるようです。話していると板書を忘れ、板書していると話の筋道を忘れる、悪い癖です。何としても直さないと学生達に気の毒ですし、申し訳ありません。どう授業を運ばばいいか、大いに研究せねばならないというところでしょう。

設問Ⅲ「教師・履修科目の全体評価」のうち「1, 全

体的教育効果」は、評価5が14.2%, 評価4が55.9%, 全体の70.1%が教育効果ありと評価。「2, 履修に値するか」は、評価5が36.9%, 評価4も同じ36.9%, 全体の73.8%が履修に値すると評価してくれています。担当者としては大変嬉しいところです。

前出のV90の卒業生の“レポートへのレポート”にこんな記述がありました。

「あの教授の授業は、全然為にならないから、履修する価値もない、と（学生に）云われる前に、自己改善を急ぎなさい」

こんな風に云われないように毎日気を引しめないといけないようです。

因みに、この卒業生は、「全然為にならないから、履修する価値もない」授業がかなりあると指摘して卒業して行きました。

「3, どの程度出席したか」の集計結果が大変奇妙な数字を出しています。90%以上出席と答えた学生が19.0%, 70%前後出席と答えた者が50.0%, つまり69%の学生が70%以上出席していると答えているのです。ところが、私の出席簿によると、3分の2以上出席した学生はもっともっと少ないのです。これは一体どうしたことでしょうか。気分では出席しているつもりになっていることなのか、或いは、少々背伸びして水増し解答をしたのか、いずれにせよ、今の若者の自己中心的な考え方が出ているようで大きな問題があることは確かでしょう。

設問Ⅳ「授業を良くする為の自由な意見」では、前回にも増して多彩な意見が書かれていましたが、前回よりややおとなしくなっているように思われます。

此処でも、「プリントを利用してほしい」「板書を多用してほしい」というのが目立っており、授業の欠点を改めて浮彫りにしています。

「何を教えたいのか方向性がよく判らない」というのがありますが、これは私の授業がもう1つ体系的でないという指摘かと思いますが、それ以外に、性急に結論・解答を求めたがる今の若者の気質の現われがあるのではないのでしょうか。

今の小, 中, 高校の教育は、“こういう問題がある。答

えはこれだ”と、問題と正解(結論)を直結させて教え、
”何故それが正解(結論)なのかを考えさせるプロセス”

が欠落している傾向があることは、あちこちで指摘されています。然し、大学では（少くとも私の授業では）それをやりません。答は、学生1人1人が自分で考えて導き出すものだと思うからです。学生の個性を重視すれば、或る学生には正解でも、別の学生には正解ではないということがありえます。まして芸術創作には答はないのではないのでしょうか。いや、答がないのではなく、総てが正解だと云うべきでしょうか。面白くて説得力があり、沢山の人が認めるものは総て正解だと思われます。

にも係わらず学生達は、自分一人の正解を独力で考え、導き出すことをしないで（或いは、知らないで）、すぐに一般的正解を欲しがるといふ傾向があるようです。私は、学生によくこんな話をします。

「この大学は自動販売機ではない。上から授業料を入れれば、下から自分が芸術家になって出て来るなどという事は絶対にないのだから………」

と――。

自動販売機で欲しい物を手軽に手に入れることに馴れ、考えることを忘れすぐに正解を求めたがる受験対策のみの勉強に馴れてしまった学生の歪みだとしか思えません。だからこそ、仲々正解を出さず、欲しい答は自力で考えて導き出さないというやり方をする私の授業を、「何を教えたいのか方向性がよく判らない」と感じるのだと思うのですが如何でしょうか。

もう1つ「大事なところとそうでないところの口調をかえればどうか」という注文がありました。これなども、自力で何が大切で、何が大切でないかを考えようとして安易に正解のみを求める甘えだと思えます。

設問V「学生番号、氏名の記入」については、今回も、前回の79.4%を上廻る82.1%の学生が記入してくれていました。私の調査に真摯に応じてくれている現われであると同時に、授業に対する不満、鬱憤、改善要求を、堂々と正面から名乗りを上げてぶつけようという切実な姿勢の現われだと受取りたいと思えます。

話は少々脱線しますが、映像学科主催の実習制作作品の上映会で学生達が作ったパンフレットに、『映像学科を斬る！』という覆面トークと『実習製作に関するアンケート』が載っていたことがありました。双方とも、我々

には耳の痛い、見ずごしに出来ない記載があれこれとあり、中には「〇〇先生はすぐ感情的になって怒るのでイヤだ」という意味の苦情が4件もあった」という実名をあげた、辛辣な記述さえありました。

勿論、冷静さをかいたり、甘えたりした学生の声に総て耳を傾ける必要はありませんが、どれが正しい指摘か、どれが甘えかをキッチリと判断し、尤もな点には誠実に対応して行かないと、近い将来必ずやって来る“大学冬の時代”に対処出来なくなることは間違いないでしょう。もっとも危機感を持って総てに対処した方がいいように思われてなりません。その為にも、個人的試みではありますが、この調査を続け、その結果には謙虚に耳を傾け、その中から将来に通じる『何か』を発見したいと思っています。

―― 集計結果の報告と反応

これも前回同様、『映像演出論』の最後の授業で集計表のコピーを配布、私の意見と感想を述べました。特に批判的な意見には、逃げずに真正面から対応、疑問はそのまま疑問として提示するよう心がけました。

「何を教えたいのか方向性がよく判らない」という指摘には、前に述べた通り、私の思うところを素直に話しました。こういう指摘があったと話した途端、一座がざわめき、

「そうかなァ」「そんなことあらへん」

という小声が聞こえました。卒業生の指摘通り、学生は十人十色、色々な感じ方があって当然です。然し、私としては常に、そうならないよう注意し続けようと思えます。

その日の出席カードの裏のメッセージは実に賑やかでした。「1年間御苦勞様でした」「お世話になりました」という儀礼的なもののほか、「授業評価は今後も続けてほしい」「他の先生にもやるようすすめてほしい」「本当にやってほしい先生はほかにいます」等というのが10枚近くありました。

研究室の先生方の反応は、前回同様、集計作業をしていてもチラッと見るだけ、副手諸君と集計結果について声高に話していてもただ通りすぎるだけで、殆んど反応がありませんでした。卒業生のレポートの中にこんな言葉がありました。

『鳥居先生は研究室内では悪役になるでしょうが、学生達にとっては正義の味方ですよ……きっと。(S君)』

——まとめ——

2度目の調査結果がまとまったことで、前回と今回を比較・検討することが出来るようになり、一歩前進したものが掴めるようになりました。自分なりに検討したところでは、前回と大差ない評価が出ていました。これは、或る授業水準は保てたということであると同時に、あまり進歩・成長の跡が見られなかったということでもあり、大いに反省しなくてはならないと考えています。

ただ、調査結果を『藝術16』に掲載して頂いたお蔭で、塚本理事長をはじめ沢山の先生方からお話を伺うことが出来、大変勉強になると同時に大いに勇気づけられました。こうした調査は続けて行く中から何かが出て来るように思われますので、今後も続けたいと思っています。是非とも、一言だけで結構ですから御意見、御感想をお聞かせ下さい。お願い致します。

平成6年4月より映像学科副手として勤務することになった青年が、アメリカの大学院を卒業しており、幸い私の調査に興味を持ってくれたようなので、アメリカの“Student Evaluation”の資料を取り寄せて貰うことが出来そうです。そうなれば、もう一歩、調査内容を充実させ、私なりの芸術系大学らしい調査票を作ることが可能になりそうです。

色々やってみて、今後の授業の糧を集め、“大学冬の時代”に対処する方法を模索したいと思います。

最後に、再度調査票の使用をお許し下さった多摩大学の中村秀一郎教授、またの調査をお許し下さった映像学科長佐々木侃司先生、感想・御意見をお聞かせ下さいました塚本邦彦理事長はじめ沢山の先生方に深く感謝の意を表します。また、集計をしてくれた副手諸君、調査に参加した学生諸君、“レポートのレポート”を寄せてくれた卒業生諸君にもお礼を申し上げます。

参考文献

- わが大学改革への挑戦, 中村秀一郎著, 東洋経済新報社, 1991
- 大学教授調査, C. J. サイクス著(株)化学同人, 1993
- 1991年12月度, 多摩大学, ボイス (学生の声) 調査報告概要, 多摩大学 VOICE 委員会